

Societal Adaptation to Climate Change:

Integrating Palaeoclimatological Data with Historical and Archaeological Evidences

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 気候適応史プロジェクト (プロジェクトリーダー 中塚 武)

2017年度 の研究審査・報告会を終えてプロジェクトリーダー 中塚 武
(総合地球環境学研究所)

地球研には2001年の設立の当初から、毎年11月末から12月頭に、「プロジェクト発表会」という研究関連所員が全員参加する恒例の行事がある。所員だけでなく、プロジェクトに参加している所外の主なメンバーも多数参加するたいへんぎやかな会議であり、私自身もさまざまなプロジェクトにかかわってきた関係上、2002年頃からほぼ毎年参加している。文理融合を旨とし、地球環境問題の解決をめざすという大風呂敷を最初から掲げていた地球研のことなので、この会議での議論は筆舌に尽くし難い激烈なものが多かった。厳しい批判の多くは、個別学問の課題にとらわれて地球環境問題の全体を見ようとしない発表に対して投げかけられることが多かったが、なかには、異分野の学問がもつ固有の論理や作法を理解できず、頭ごなしに相手の研究の価値を否定するような乱暴な議論も多かったと記憶している。およそ一般社会ではお目にかかれない、まさに「歯に衣着せぬ」ダイナミックな討論は、子どもの頃から議論好きであった私には、たいへん魅力的で面白いものであった。しかし地球研の関係者の多くが異分野融合研究に慣れ、地球環境問題の解決に向かう研究の難しさを肌で体験するようになるにつれて、そうした乱暴な議論は次第に影を潜めるようになってきた。地球研の研究予算の削減によってプロジェクトや研究員の数が増減してきた近年は、参加人数の面でも往年の迫力はなくなってきたが、会議の議論が成熟してきたことは、本当の意味で地球環境問題の解決をめざす研究所としては、むしろ好ましいことであるといえよう。

今年も11月29日～12月1日の3日間、四条近辺のコープイン京都を会場として会議は開催された。昨年度から地球研ではプロジェクトを束ねる上位組織として3つのプログラムを立ち上げ、それぞれに専任のプログラムディレクターが着任したことを受け、この会議の名称も「プロジェクト以外の研究の議論も行なう」という意味で、「研究審査・報告会」に変更されている。1日めと2日めの午前中は、新規プロジェクトの審査に向けた

発表(FSの報告とFRの提案)があり、そのあと3日めまで、私たちの気候適応史プロジェクトを含む現行のプロジェクト／プログラムの報告が行なわれた。プログラムの議論では、私たちのプロジェクトのような「環境問題の解決をめざした社会との直接の協力の窓口」をもたないプロジェクトにも、プログラム内の他のプロジェクトとの連携によって、問題解決にまっすぐに貢献できる道筋があること(具体的には、環境問題の解決の障壁になることが多い土地利用／所有のあり方をめぐって、その歴史的な理解を共有できること等)が確認された。

気候適応史プロジェクトの発表では、多くのプロジェクトメンバーが執筆に参加している日本語での全6巻の成果本の目次を示したうえで、それに沿って文理双方から具体的な研究成果を紹介した。なかでも、考古学、年輪年代学、分析化学など多くのメンバーの尽力のもとで、日本各地の樹木年輪セルロース酸素同位体比の超長期クロノロジーなどの古気候プロキシによる気候変動データの拡充が進み、それが先史・古代、中世、近世の各時代の歴史の解釈に大きな影響を与えつつあることは、データの豊富さ／詳細さとその歴史学・考古学的なインパクトの強さ／解釈の斬新さの両面から、素直に高い評価を受けることができた。今回はとくに縄文中期(紀元前2800年頃)まで年単位の古気候データが延伸されたことで、縄文時代の社会構造の研究においても高分解能古気候データという新しい物差しの価値を強く印象づけられたことは、一つの大きな進展であった。現在、各グループで原稿の執筆が進む全6巻の成果本が出版されれば、今回の会議で受けた率直な評価を社会一般から受けることも可能になる。

プロジェクトは終了まであと1年と3か月を残すばかりとなったが、最後までプロジェクトメンバーの皆さんからのサポートを支えに、緊張感をもって成果の取りまとめに邁進していきたい。



木製出土品の酸素同位体比年代測定による 鹿乗川遺跡群の環境変遷復元

先史・古代史グループ
植上 昇 (愛知県埋蔵文化財センター)

私は2016年10月に、吉川弘文館の歴史文化ライブラリー・シリーズの一冊として、『樹木と暮らす古代人——木製品が語る弥生・古墳時代』を出版しました。

この本の章立ては、

序章	持続可能な社会をめざして——プロローグ
第1章	森と生きる 森と人とのかかわり 木材の流通を復元する 木製品には何があるのか
第2章	鋤は語る 鋤の機能を考える 鋤の系譜と伝播
第3章	首長と王の所有物 みせびらかす器、隠匿する器 儀杖から武器へ
第4章	うつりゆく木製品 精製木製品の変遷 専門工人の出現と展開
終章	弥生～古墳時代には「林業」はあったのか?——エピローグ

という6章からなっています。

2011年の東日本大震災とそれともなう福島第一原子力発電所の事故以降、「サステナブル=持続可能」な資源が注目されるようになり、さらに2013年に角川書店から刊行された藻谷浩介氏らによる『里山資本主義——日本経済は「安心の原理」で動く』がベストセラーになったことによってペレットなどの木材資源が一躍脚光を浴びることとなりました。

木材資源は石油や石炭のような化石燃料とは異なり、伐採しても萌芽更新(伐採後に萌芽し生育すること)や植樹によって「再生」という特徴をもっています。とくに暖温帯に位置する日本列島は本州の西半分の地域の多くが常緑広葉樹林帯に属しており、おもに弥生～古墳時代の人々はこの樹林帯に自生するアカガシ亜属の大径木を鋤や鋤、堅杵などの農具に利用してきました。

それとともに、集落の周辺には堅穴建物の建築材や土木作業に用いる杭材、そして日々の燃料材となるコナラ節・クヌギ節などの落葉広葉樹を主体とする二次林(里山)を人為的に創り

出してきました。そして、その恵みにより、長ければ数百年間にもおよぶ大集落が維持されたのです。

本書では、これまで考古学研究ではあまり触れられてこなかった弥生・古墳時代における木材資源の入手法や、森と里山の維持管理について、とくに第1章においてページを割いて詳述しました。

図1は岐阜県関市北東部に分布する遺跡の立地です。これをみると、わざわざ山の斜面地を集落としていたことがわかります。しかもこの斜面地に全面展開するのではなく、それぞれの集落の間に大きな空地があることに気がつきます。おそらく弥生～古墳時代には、この空地にアカガシ亜属の大径木を主体とする森林があり、この森林資源を皆伐(区画の樹木をすべて伐採すること)してしまわないために、集落の面積を最小化していたのではないかと私は考えました。

いっぽう図2の愛知県安城市にある鹿乗川流域遺跡群では、碧海台地の縁辺に数多くの集落が、南北に長く展開しています。碧海台地は今でこそ集落や水田となっていますが、この遺跡群が最大化する弥生時代後期～古墳時代前期には、落葉広葉樹にマキ属などが混じる「里山」的環境があったことが、これまでに出土した木製品や自然木の樹種同定結果からわかっています。

このうち姫下遺跡から出土した木製品について、樹種ごとに年輪数を測って本来の樹齢を復元し、グラフ化したの

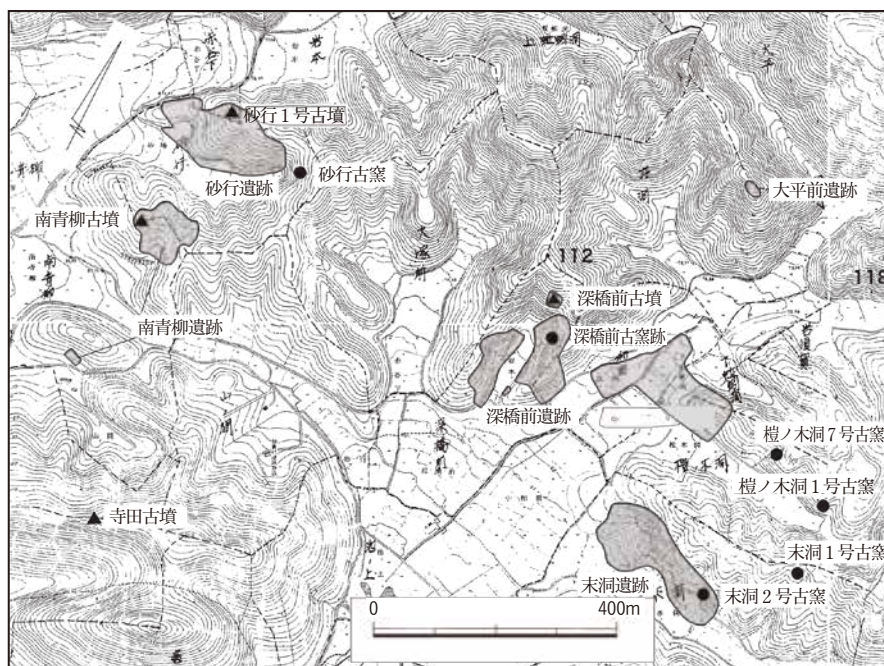


図1 岐阜県関市北東部の遺跡分布

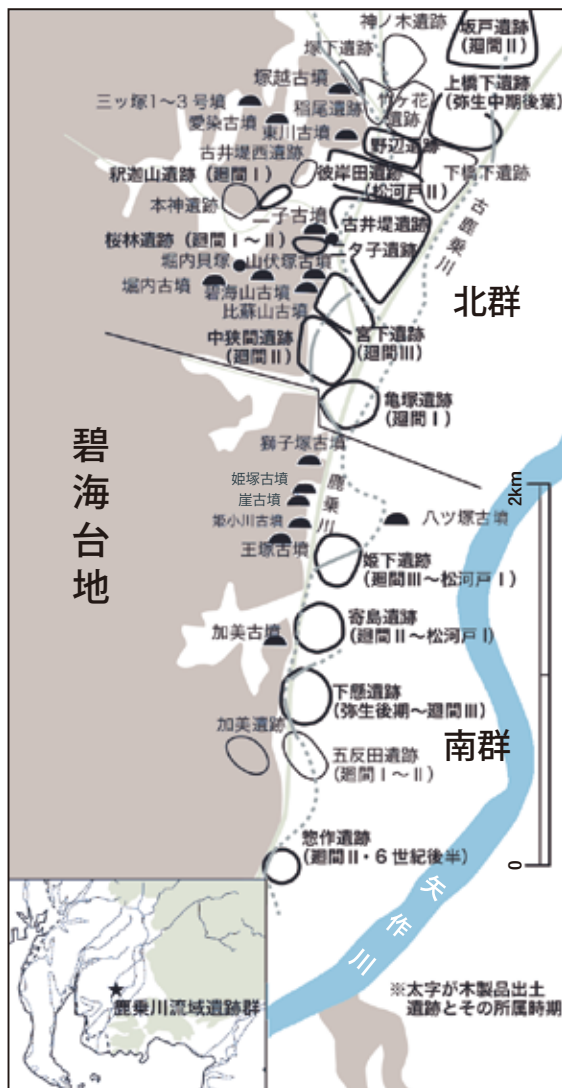


図2 愛知県安城市鹿乗川流域遺跡群

が図3です。このグラフをみると、樹齢20～30年前後の木が圧倒的に多いことが読み取れます。この20～30年という年数は、森のなかで木を伐り、ロクロを使って木製の椀やコケシなどを作っていた近世の木地師が、ある場所で有用な木材を伐り尽くしたのち他所へ移動を繰り返し、また元の場所に戻ってくる年数とほぼ同じといえます。これはけっして偶然の一致ではなく、有用な木材を皆伐したあとで、木材資源が萌芽更新して元どおり復元する年数だったのです。

ただ、この鹿乗川遺跡群で確認された集落がすべて同時に併存していたら、おそらく碧海台地の森はあっという間に伐り尽くされて、再び森が回復する暇はなかったのではないかと考えられます。

つまり、図2にみる鹿乗川遺跡群の姿は、およそ300年間におよぶ人々の活動した痕跡の累積であり、実際には森林資源を枯渇させないように、出土した土器の編年観には現われないレベルでの細かな居住地の移動が頻繁になされていたのではないかと私は推測しています。

そこで地球研の気候適応史プロジェクトへと話は移ってきます。現状で集落の時期を決定する根拠となる土器編年は、いくら年代の物差しを細かくしても、一つの土器型式の存続期間は、せいぜい20年より狭くすることはできません。もちろん土器付着炭化物を用いたAMS年代測定法においても同様です。

しかし、木材の酸素同位体比による年代測定法では、樹皮直下まで遺存している木材が複数の集落から多量に出土していれば、それぞれの木製品群のまとまりに1年単位の年代観を与えることが可能になります。こうして複数の集落でみつかった多数の木製品のまとまりごとに年代のズレが確認できれば、これこそがまさに具体的な碧海台地の森林利用における伐採時期の差を示していることになるのではないかと私は考えています。

さらに、これらの木製品群が出土した河道の埋土が洪水層に覆われていれば、年単位で何回の洪水が起こったのかも知ることができます。

実際に、私が所属する愛知県埋蔵文化財センターでは、鹿乗川遺跡群から出土した木製品や木材をこの気候適応史プロジェクトに多数提供しています。これらの木製品からどのような年代値が出てくるのか、そして、そこから碧海台地を含む鹿乗川遺跡群の環境の変遷をどのように復元できるのか、ときどきワクワクする日々を私は送っています。

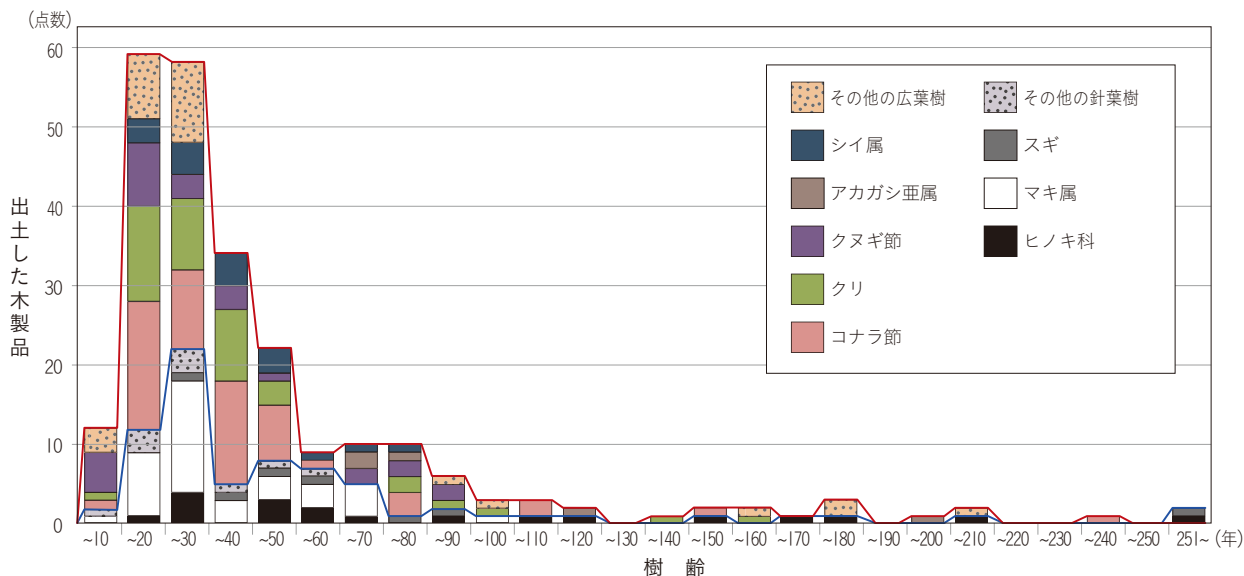


図3 姫下遺跡の樹種別復元年輪数グラフ(廻間III～松河戸I式期)

近世の温暖・乾燥期の農村事情

下野国の事例から

近世史グループ 平野哲也(常磐大学人間科学部)

関東は、明和7・8年(1770・71)と文政4年(1821)に激しい旱魃に見舞われた。下野国(現栃木県)の同年の古文書には、「大干損」^{かんぼつ}「世上一同大旱魃」^{しもつけのくに}「是迄申伝ニも無之旱魃」といった文言、河川や用水路の渇水、溜池の干上がり、水田のひび割れなどの記事が散見される。「苗枯」、田植え後の「旱枯」^{かんそん}、畑作物の全滅など、水不足による作物被害を訴える文書も数多い。下野国の各地で水争いが頻発し、それをきっかけに、水資源の公平な分配秩序が再構築されている。百姓が体験した旱魃の深刻さは、中部日本の年輪酸素同位体比の経年変化がしっかり裏づけている(図1)。古気候学が18世紀後半～19世紀前半の乾燥化を解明しているが、問題の3か年は、そのなかでも突出した乾燥年(夏季降水量が極少)だったのである。

古気候データ(図2)が示す文化・文政年間の温暖傾向についても、下野国の古文書が語る世界とつき合わせてみよう。

都賀郡鹿沼宿(現栃木県鹿沼市)の商人が残した米価の記録によれば、宝暦・安永・文化・文政年間は米1石あたりの価格が金1両を大きく下回る年が多く、天明飢饉時の暴騰を例外として、米価安の状態が長期的に持続していた。

那須郡両郷村(現栃木県大田原市)の関谷家が文化7年(1810)以降記帳した米の取量変化を見ると、文政年間の取量増が際立っている(ただし、文政4年は大幅な取量減)。ある圃場^{なす}*1では平均2石3斗余の反収^{りょうこうむら}*2をあげ、文政1年(1818)は2石7斗余の高水準に達している。

こうした米価・取量の推移は、文化・文政年間の豊作続きを雄弁に物語る。それが当該期の温暖な気候に起因したことは明らかである。

塩谷郡桜野村(現栃木県さくら市)の地主・米穀肥料商の瀧澤又兵衛が文政12年(1829)に著し、文化・文政年間の主穀生産地帯の社会情勢をありありと伝えてくれる『田夫真手兵衛無手物語』という書物がある。そこには、農耕を縮小・放棄し、「工商」や「町の風俗」に憧れ、商売や職人稼ぎに励み、「商人よりも算用之事のみ心かけ」、「銭をもふけるくめん計り」の百姓(とくに若者)の姿が描かれている。当時の百姓は、苦勞のわりに実入りの少ない「農」と、いち早く現金が得られ豊かに暮らせる「工商」の生業を比較し、進んで後者を選び取っていたのである。また、又兵衛の見るところ、百姓たちの間に、稗・麦を避けて白米を食べ、^{しおん}諸白^{ひえ}*3の清酒を飲み、値段の高いものばかり追求め、身綺麗に着飾る贅沢な風俗が蔓延していた。又兵衛は、その背景として「天道様の御恵よく、五穀豊実して、何ニも不足なくな」った時代状況を見抜き、天明飢饉の苦難を忘れ去った百姓の安逸・油断に危機感を募らせた。そこで、飢饉の記憶を記録にとどめ、後世に継承し、常なる用心(農耕への専念、消費の抑制、貯穀)をうながすために『田夫真手兵衛無手物語』を著したのである。

古気候学の成果をふまえて又兵衛の観察内容を読み

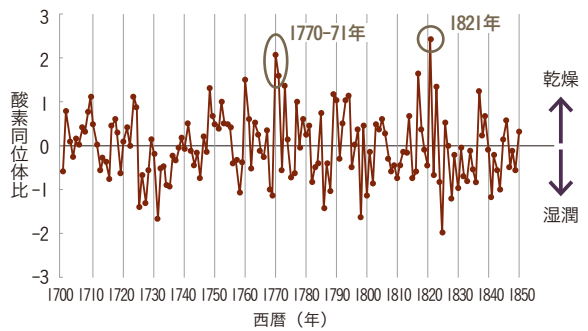


図1 中部日本の年輪酸素同位体比(平均値0からの偏差)^{*4}
1700～1850年の150年間で、1821年は最も酸素同位体比の高い年(6～7月の降水量が最も少ない年)であった。同様に、1770年は2番めに、1771年は4番めに雨が少い年であった。

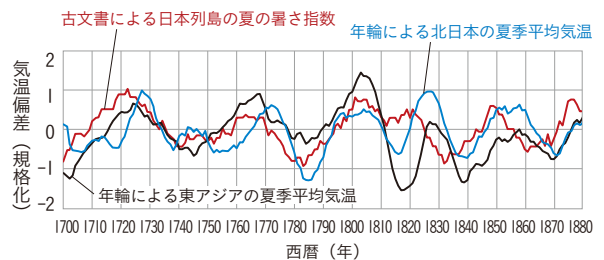


図2 江戸時代の気温の変化(11年移動平均)3指標

赤青黒の各データはそれぞれ別の出典によるものであり、同一グラフ上に載せるために、規格化して表示している(平均値を0として、各年の値を「偏差」にし、変動幅をそろえるために、それぞれの偏差を、全体の標準偏差で割っている)。また、長周期の変動を示すために、「11年移動平均」にしている。

解くと、文化・文政年間の下野国主穀生産地帯では、温暖化が米の豊作に寄与したのと裏腹に、米作中心の農家経営の不振(米価安)をまねき、より有利な稼ぎ(現金収入)をめざす百姓の行動を後押しした、という因果関係が導き出される。しかも、収入を増やした百姓の消費行動は活発化し、米穀も安く購入できるようになったため、彼らの生活水準は押し上げられた。従来、当該期の百姓の離農・離村は「農村荒廃」と称され、百姓の貧窮・没落の過程として理解されてきた。しかし古気候データは、寛政年間以降数十年におよぶ温暖期が、天明飢饉の辛酸をすっかり忘却させるほどの米穀余剰をもたらした、百姓の消費拡大と生業選択を助長し、農耕(とくに米作)の縮小・放棄に向かわせたことを教えてくれる。そこから、気候変動や社会経済条件の変化に積極的かつ機敏に対応する百姓の姿が浮かび上がってくる。

日々の天候の影響下に営まれた百姓の生産・暮らし、その観察眼と意志・行動を具体的に理解・追体験するうえで、古気候データはきわめて有効かつ重要な手がかりとなるのである。

*1 圃場…作物を栽培する田畑
*2 反収…一反あたりの収穫高
*3 諸白…こうじも米もともに精白したものでつくる日本酒の醸造方法
*4 中塚武「気候変動と歴史学」平川南(編)『環境の日本史1 日本史と環境-人と自然-』吉川弘文館 2012年 pp.38-70。(佐野雅規氏提供)

三井文庫蔵の江戸時代史料

「日記録」と

気候変動史

近世史グループ 村 和明（公益財団法人三井文庫主任研究員）

筆者が勤務する三井文庫は、17世紀の大商人三井高利に始まり、現在の三井グループにいたる三井の歴史資料を収集・保管・公開し、また社会経済史の研究を行なう機関である。ルーツは戦前の三井財閥時代にさかのぼるが、現行の法人は戦後に設立され、三井グループ各社の賛助により、文書館と美術館を運営している。歴史資料をひろく学界・一般に公開しはじめて51年めをむかえた。

三井文庫がもつ歴史資料は基本的に三井関係で、近世の諸店舗、近代の三井財閥・三井グループ系企業の経営書類や、一族各家の文書が主である。おおむね三井が勃興した17世紀後期から、財閥解体までが中心で、点数はいちおう約10万点と公称しているが、収集を継続しているために増加中である。このうち、気候適応史プロジェクトで活用されているのは近世の

記録である。気候や災害の情報も豊富にあるが、とくに大坂両替店「日記録」という史料が重要な役割を果たしている。

近世の三井は日本最大級の経営体で、呉服業（三越のルーツ）と金融業（三井銀行のルーツ）を事業の両輪とした。「日記録」は、金融業部門に属した大坂両替店の業務日誌である。店舗は高麗橋（こうらいばし）二丁目に元禄4年（1691）に出店され、日誌は享保2年（1717）から明治7年（1874）まで、115冊（39冊が欠本）が残されている。記述はその日の天気始まり、業務や従業員の動向、幕府の人事から災害情報までバラエティーに富む。

これらの情報のなかで、本プロジェクトできわめて重要であるのは、天明7年（1787）から明治4年（1871）まで記される、毎日の諸相場、とくに米相場の数値である。天明期に赤字だった大坂両替店の経営立て直しのため、京都から赴任した重役が指導し、記録を始めたらしい。

一地域の一商品の相場情報が、本プロジェクトで重要になるのは、次のような理由による。

①農業を基幹産業とした近世の日本において、最大の商品は米であり、大坂にはその中核的な市場が存在していた。したがって、大坂の米価は全国的な農業生産と物流の動向に基づいて形成されてきたこと。

②大坂の米市場では先物取引なども行なわれ、金

融市場の側面もそなえており、ここで幕府・大名は、税として領地で徴収した米を換金するのみならず、将来の廻送分を抵当にした借財も恒常的に行なっていた。したがって、その相場は全国の行政（産業振興、インフラ整備、防災・復興等）をになう幕府・大名の財政基盤に直結したこと。

③中長期にわたり、全国的な動向と関連性をもつ数量データは、前近代では稀であること。

④広域的・地域的に得られている古気候データに対し、近世社会の変動については、地域的な情報が近世史グループの他のメンバーにより豊富に提供されており、これに広域的な生産と物流の変動を反映して形成される物価の情報を加えることで、豊富な分析視角が得られること。

筆者および神戸大学経済経営研究所の高槻泰郎氏（近世史グループ）は、先行する複数の共同研究プロジェクトにおいて、「日記録」の米価などについてデータベースを作成し、すでに同研究所のホームページ上で公開し、また幕府の経済政策との関連性を分析している。気候適応史プロジェクトにおいて、米価などと気候変動の関連性にも分析の対象をひろげている。

このデータは、同時代の全国各地の詳細な気候の動向はもちろん、近世史グループの他のメンバーの研究と関連づけられることで、いっそう大きな成果を生み出すことが期待される。中央市場の日々の動向を、各地の農業・災害・行政等の精緻な実態解明と重ね合わせていくことで、中長期の気候変動が列島社会の全体および細部に及ぼした影響を、多角的に観察することが可能となり、近世の列島社会の気候変動への耐性・脆弱性、一体性・局地性、達成と限界を評価する、有力な視座が得られるのである。

観測報告

樹木年輪と山岳アイスコアを用いた
気候変動の高度依存性の解明に向けて

プロジェクト研究員 古気候学グループ 對馬 あかね (総合地球環境学研究所)

本年度から採択された佐野雅規さん(古気候学グループ、早稲田大学人間科学学術院)研究代表の科研費基盤研究A(海外学術調査)「樹木年輪と山岳アイスコアの統合解析によるアジア山岳域の標高別古気候復元」の調査のため、10月13日から11月21日にかけて、ネパール・ヒマラヤ、ロールワリン山域にあるトランバウ氷河に行ってきました。

気候適応史プロジェクトでは樹木年輪だけでなく、サンゴや鍾乳石、そして堆積物などを総動員して縄文時代まで遡る気候変動を、日本を含めたアジアの広範囲で解明することを一つの目的としています。氷期や間氷期などの数十万年スケールの気候変動に比べ、数十年から数百年規模で生じる気候変動は地域による違いが大きく、その変化の程度を詳細に理解することは簡単ではありません。たとえば、完新世での大きな気候変化の一つに、小氷期と呼ばれる、15～19世紀に生じた比較的寒冷な期間が存在します。小氷期が生じた要因として太陽黒点活動の低下や火山活動の増加などが主な原因としてあげられている一方で、海洋、氷床変化などの寄与も大きいという可能性が指摘されており*、小氷期期間中の気候変動は、その変動期間や変動内容が地域によって異なることがわかってきています。

さらに、気候・環境の変化は標高によっても大きく異なり、高標高域は低地に比べ、温暖化に敏感に応答するといわれています。近年、古気候記録は全球的に広い範囲で面的に拡充されてきている一方で、鉛直方向の空間解像度は低く、気候変動の高度依存性を解明できるまでにはいたっていません。過去の気候・環境変化の本質を理解するためには、気候適応史プロジェクトがこれまで進めてきた面的に広範囲かつ高時間分解能のデータだけでなく、高度別のデータの収集・解析も必要不可欠であると考えています。

本研究では「樹木年輪」と「山岳アイスコア」の2つのプロキシを用いています。樹木年輪は、陸域の広範囲に森林が分布していることから空間分解能が非常に高いことに加え、1年単位の高い時間解像度で気候復元ができる、非常に強力な古気候プロキシです。一方山岳氷河から採取されるアイスコアには過

去の降水量の変化が積雪として保存され、かつ、陸域で最も高標高域の古気候記録を保持するプロキシであるため、両者を統合して解析することで、気候変動の高度依存

性を議論することが可能になります。そこで、両プロキシが存在するアジア山岳域を研究対象域としました。アジアでは高標高域に存在する氷河が、水資源として利用されるなど高標高域の変化が数十億人の生活に甚大な影響を及ぼすため、高度別の気候変動の理解は重要な課題であると考えています。

今回の観測の主な目的は、本科研費で2019年度に予定しているアイスコア掘削の掘削地点を確定させることです。

10月17日の早朝にネパールの首都カトマンズを出発し、バスで10時間半かけて、標高1000mほどにあるゴンガールという村に着きました。翌日から高度順化を兼ねてゆっくり山を登り、10月25日に氷河に上がりました。そこから、氷河の厚さや流動の観測を行ないながら、約5600m地点の最終キャンプ地に向かいました。最終キャンプ地から約5km登った、標高5800m超地点がアイスコア掘削の候補地です。

11月4日の早朝にキャンプを出て約4時間後によくアイスコア掘削の候補地に到着しました。名古屋大学藤田耕史准教授(古気候学グループ)のチームによる昨年の観測では、この地点は涵養して(1年間で融ける雪の量より降り積もる量のほうが多く氷河が成長している)いましたが、最悪なことに、今年はこの地点でも氷河の質量収支はマイナスになっており(つまり、1年間で降り積もる雪の量よりも融ける量のほうが多く、アイスコア掘削には適していない可能性が高い)、さらに氷河の表面には融解水が流れてできる水路が見えていました。氷河の質量収支は年によって変化するので、この状況だけでは一概にアイスコア掘削に適していないとは判断できないため、できるだけ良い場所を選び、掘削を開始しました。掘削開始からまもなく、掘削ドリルが融解再凍結層内(氷河内で融解水が再び凍結した箇所)で止まってしまいました。本来の目標深度には到達しませんでした。2.5m掘り出したコアの状態を観察し、この地点はアイスコア掘削に適していないと結論づけました。

もちろんアイスコア掘削地点の候補地を決める際には、これまでの観測データや衛星データを解析し、何度も話し合っ慎重に決めています。自然相手なので、実際に現地に出向いてみないとわからないことがたくさんあります。ロールワリン山域では、標高6000m付近でも氷河が融けている、という事実を受け止めて、新たな掘削場所を早急に検討しなくてはなりません。山岳アイスコア掘削の難しさを今回改めて痛感しました。

* 増田耕一「小氷期の原因を考える」『地理』古今書院 1992年 37(2), 56-65.



写真 上：掘削地点に向かう著者ら/左：掘削地点にて記念撮影(撮影はともに藤田耕史)

【連載】 あのころ

1984

中世史グループ 田村憲美（別府大学文学部）

私は早稲田大学大学院博士後期課程に1979年に進学、82年に退学した。日本学術振興会の奨励研究員に1年足らず就いたあと、研究者志望のまま、さらに10数年の間、東京で暮らした。それができたのは、『角川日本地名大辞典』の編集室で仕事をしていたからである。

そこには角川本社から出向の正社員編集者、期限つき契約の嘱託編集者のほか、2か月ごとに契約を更新するアルバイト職員が数十名から百名近くいた。このアルバイト職員は大別して、原稿を校閲する日本史専攻の大学院生・オーバードクター、原稿を整理する学部卒業者からなっていた。1000頁超の県別地名辞典を年4冊刊行する辞書工場たる編集室は、飯田橋の事務所ビルの2フロアから、のちには湯島の貸ビル全体を占めた。私は最初週2〜3日、後には週4〜5日勤務した。

原稿整理担当は都内女子大学を卒業して指導教員の推薦で採用された方々で、カフェやコンサート、下北沢の小劇場や村上春樹の新作などの話題が、背中を聞いている私には珍しかった。1982年の浅草国際劇場最終公

演や84年の『風の谷のナウシカ』にもこの人たちがいなかったら行かなかったかもしれない。角川の新刊雑誌も回覧されたから、「ザ・テレビジョン」や「ニュータイプ」でテレビを持たない私もアイドルやアニメに親しくなった（『ナウシカ』は徳間だったが）。編集者からは新刊ノベルズをいただいた。

校閲担当の中・近世史を専攻する大学院生はほとんど私立大学の方々に、早稲田のほかには明治・法政・学習院・駒沢などだった。編集室には小規模だが充実した資料室もあった。私たちは各県の著者から届いた原稿を執筆要綱と史料に照らして修正・訂正し、原稿が届かない場合は新規に作成し、毎日、専用原稿用紙にかなりの量の記事を書いた。大和国（奈良県）をフィールドに中世成立期の研究をしてきた私も、ここでは日本各地の戦国時代までの史料を短時間に読解し記事に位置づける必要があった。解らないことや思いつきは周りの有能な人々に質問して議論した。退勤後には神田の学会の研究会に回った。死亡の季節性や村落領域論という、研究上有望な2つのアイデアを得たのはこの職場でのことである。本社出向の部長は私たちの自

由な勤務態度にあきれていたものだ。

契約打ち切りは90年1月だった。私は96年に別府に赴任したけれども、それは別の話。『角川日本地名大辞典』はバブル時代が後世に遺した学術的・文化的成果だが、編集室が生み出したのは辞典だけではない。たぶん他の方々にとってもそうだったろうと思う。



『日本地名大辞典・奈良県』のために、筆者が編集室で作成したメモ・原稿下書きの一部。整理用の封筒は当時編集室で使用されていたもの。

研究室通信

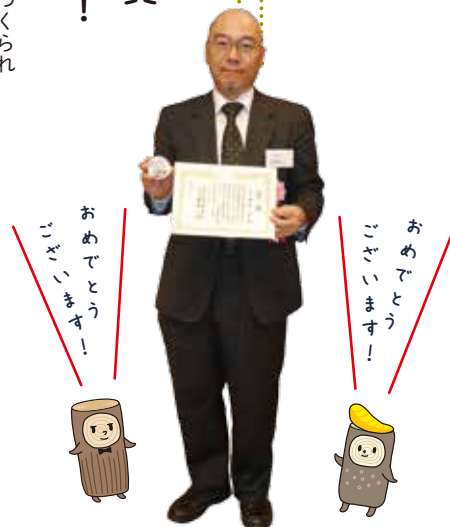
中塚リーダー

地球化学研究協会学術賞
「第45回三宅賞」を受賞!

「三宅賞」は故・三宅泰雄博士を記念してつくられた賞で、地球化学の研究に顕著な業績を収めた科学者に贈呈されるものです。中塚リーダーは熱分解元素分析計と同位体比質量分析計の組み合わせからなる有機物の酸素同位体比の測定手法を大きく改革し、開発した手法を樹木年輪に応用して、日本やアジアのモンスーン地域の樹木年輪セルロースの酸素同位体比が湿度の鋭敏なプロキシになっていることを発見しました。また気候適応史プロジェクトを立ち上げ、気候に関する精密な理系の分析・解析を土台として、人間社会への影響を推定するなど先駆的な研究成果が幅広い関心を集め、今後の地球化学の発展に大きな貢献をなすものと評価されました。これをうけて2017年12月2日(土)霞が関ビル35階東海大学校友会館にて、受賞式と受賞記念講演「樹木年輪酸素同位体比を用いた高時間分解能による古気候学の推進と歴史学・考古学への応用」が行なわれました。



2017年11月24日(金)、文部科学省の西井知紀学術機関課長が地球研を訪問されました。当プロジェクトからは、中塚リーダーと鎌谷サブリリーダーが、高分解能古気候学の最新の成果を歴史学・考古学の知見に結びつけ、過去に起きた気候変動の実態と、気候変動に対する社会の適応のあり方について、解説スライドや古文書を示しつつ説明しました。



文部科学省視察

2017年11月24日(金)、文部科学省の西井知紀学術機関課長が地球研を訪問されました。当プロジェクトからは、中塚リーダーと鎌谷サブリリーダーが、高分解能古気候学の最新の成果を歴史学・考古学の知見に結びつけ、過去に起きた気候変動の実態と、気候変動に対する社会の適応のあり方について、解説スライドや古文書を示しつつ説明しました。



地球研の歌

地球研では所員が応募し審査する写真コンテストが毎年開催され、優秀な作品は地球研のリーフレットやホームページなどの広報関係資料として活用されています。2017年度特別賞として、動画「地球研の歌」(作:寺本瞬、皇甫さやか、木村葵)が選出されましたので、YouTube 地球研チャンネルからお楽しみください。地球犬のいい加減な動きとテンポのよいメロディに癒されることうけあいです。



<https://youtu.be/EzSF9ljWC2k>



地球犬とネンリンジャー



今後の予定

2018年1月6日(土)ー7日(日) …… 全体会議
2018年1月13日(土)ー14日(日) …… 先史・古代史会議



もう少して新しい年を迎える…。はやる気持ちがおさえきれず「うしざんまい」してしまう中塚リーダーとその仲間たち。鯖ぐらいはさばくのでしょいか。いいえ、なんにも。

成年がたのしみ

